概要版

第４回　豊岡市生物多様性地域戦略　第３期短期戦略策定委員会　議事録

日　　時：2023 年２月 14 日（火）14：00～16：10
場　　所：豊岡市稽古堂　３階　交流室３－１
出席委員：菊地直樹委員、出口智広委員、菅村定昌委員、田中陽介委員
　　名城千鶴委員、森本莉永委員、高橋佳大委員、藤田楓加委員
事 務 局：豊岡市コウノトリ共生部　川端部長
　　農林水産課　柳沢課長
　　コウノトリ共生課　宮下課長、宮田参事、兵藤係長
　　受託事業者　復建調査設計㈱　梅本

開　　会　：菊地委員長あいさつ

≪以下　→：委員発言、**⇒事務局発言**）

◎報告

（１）今後のスケジュールについて

⇒事務局より説明

（意見及び質疑等）

→特になし。

（２）パブリックコメントに対する対応について

⇒資料１に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

【№５】

→生きもの博士などの交流できる場を提供します。と書かれているが、具体的にどんなことを考えているのか。

⇒まずは「生きもの博士」という制度をしっかりと作っていきたいと考えている。それが出来てから、その方々が交流できるような場の提供を検討していきたいと考えている。

→生きものに関心のある人を増やすためには、地域住民自ら地域のことを知り、発信できる環境づくりが非常に大事である。あるのが当たり前となってくると、マンネリ化してしまう。その価値が分からなくなってしまう。他の自治体、地域に知ってもらうことによって自分のところにある価値、誇りを見直すということもある。そういう機会を作るべきだと思っている。今後作る戦略推進委員会の方に振ってくれればいくらでもその場を作ることには協力できる。なるべく地域の方を主役にすることで盛り上げていけると思っている。

→せっかく大学院があるので、行政としても市民としても積極的に利用していくことが重要かと思う。石川の方では、金沢大学能登学舎という能登半島の

先で、廃校になったところを学舎として再生して、社会人の人材育成とか移住とかを促進するような人材育成プログラムをやっている。そういうものの発展形として交流がメインではあるが「能登里山里海学会」と言うものがある。学会とは言っても研究発表もします、というくらいのもの。例えば豊岡でそういうような研究も入れながら、いろんな人が交流するような場を発展的にこの５年の間で考えてみるというのもありかもしれない。

【No.８】

→意見にある「項目を加える必要がないでしょうか」ではなく、その後からの文で、「モデル地区を創っていくことが大切だと思います。」の次に「里山なら妙楽寺」とか具体的な地域を出していただいている。その後に「里山の取り組みは遅れていると思います。」と指摘をいただいている。一方、返答の方では、「モデル地区として支援する。」ことだけしか書いてない。一般市民の方からしても里山の取り組みが遅れているのが目立って分かるからこういうのを入れてもらっていると思うので、里山の方でも生物多様性の保全に力を入れたい、というような姿勢が分かるように示してあげてはと思う。

⇒里山の関係についての話しで、森林林業ビジョンの中でも里山に対するアクションというのはある。そういった方向に沿って実際の事業を展開していきたいと思っている。これまでも里山の事業は、市内各所で色々と行われてきたと思う。整備をした時はきれいに見えるが、中々それを維持管理していく、ずっと使い続けていくのは凄く難しい問題だと肌で感じている。森だけに限らず、おそらく何にしても継続して活動を支えていく、活動を展開するような仕組みにしていくことが凄く大切だと思うので、森林林業ビジョンの中ではそういった観点を十分踏まえて進めていければと思っているので、調整出来ればと思う。

→森林林業ビジョンの内容の一部を短期戦略に反映することもお願いしたい。現状でやっていることがあれば、そういうことも書けるかもしれない。

【No.11】

→地元住民が地域食材に触れる機会を、というご意見をいただいているが、右側の答えが農業の知識を深めたり、農産物の価値となっている。そこは漁業も一次産業の基盤だと思う。農業というよりも農林水産業とか、地元産農産物や水産物というような答えのほうがふさわしいのではないかと思う。

⇒これまでから、山の物や水産物も第一次産業の基盤強化への支援に必要だという議論があった。生産者と消費者が触れる取り組みをされているところもあるので、もう少し表現を考えたい。

【No.11】

→戦略の取組みにも間接的に関わってくる内容であるが、地元の住民の方々が地域の食材に触れる機会について、ここで言いたいのは、コウノトリ米に限らず、地元の農

産物であったり、魚だったり、農林水産に関わるものを購入できる機会であったり、触れる機会を増やして欲しいということかと思うので、認証品に限らず地元産に触れて選んでもらえるという形に変更を加えるほうがいいのではないか。

⇒戦略にあるように、まず地元産品を扱う店舗を増やしていく、まずは地元産品を選んでいただく、と。これについては生物多様性の観点からも、地球温暖化の観点からも複合的にいいということもある。その上で、さらにコウノトリの舞認証商品を選んでいただきたいという思いも持っている。コウノトリの舞認証品ということに限定して書いているので、地元産品を加えることを検討する。

【No.12】

→SNS を活用して外部に露出するべきでないか、という意見をいただいているところだが、右側の返答のところに、実際 SNS を運用されていると思う。今あるアカウントを回答に盛り込めたら周知につながるように感じる。

→SNS を活用して発信という部分も、どの取組みにも当てはまると思うが、インターネットだったりメディアを通して発信をしていって認知度をアップしていきますよというのも盛り込めたらいいのではないかと思う。

⇒この回答を PR の機会の一つとして、二次元バーコード等で紹介したい。

【No.14】

→戦略推進委員会とは別に個別の課題について検討協議を行う場を設けます、とあった。この数年火入れしていない山で、有志を集めて、試しに木を伐りに行くこととしたが、様々な関係者があり、とても大変だった。例えばそういったことを事務局でしてもらったりできるのか。

⇒民間の方にしていただける取組みにおいて行政が間に立つ部分もあるかと思うが、この個別検討会では、そこまで個別の話しではなく、もう少し大きな道筋を議論するのかというイメージを持っている。ただ、今あったような事例も、個別に相談していただきたい。

→今回は個人単位で動いたのだが、ワーキンググループで動くこともあるのかもしれない。また、同じような火入れをしている地域もあるので、火入れというものを持続的にするには、火を入れる技術だけでなく、いろんな人とどうつながるか、どこにどう話しを通していけばいいかなど、いろんな知識が蓄積されていると思う。今だとリモートでつなぐこともできるので、地域同士のネットワークづくりや、勉強会しながらいかにうまくできるか、みたいなことを考えていくことも推進委員会、あるいはワーキングの仕事かなと思う。そういうような横のつながりを作っていくのが重要かと思う。中々個別にすると大変だと思うので、一人で抱え込まないで、みんなで、そういうことが出来るような実効的なチームを作るというのも、ワーキングなのかなと思う。

→例えば市民の声を拾い上げたり、相談を受け付けて実際に行動に移したり、支援を行うワーキンググループがありますよ、と書いた方が分かりやすいの

ではないかと思う。

⇒民間レベルで保全に取り組まれる方をどう応援していけるのかという部分、本当に大切な事だと思う。そういった課題があるということを認識した上で今後検討させていただきたい。

→市民に平たく開かれた場にしなければならないという意見だったと思う。それはまた来年度の課題であるが、今の意見も踏まえて、そのような課題があるということを共通認識としていきたい。

◎議事

（１）第３期短期戦略について

（ア）第３期短期戦略

⇒資料２に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

→特になし。

（イ）第３期短期戦略数値目標の設定

⇒資料２に基づき事務局より説明

（意見及び質疑等）

【全体を通じて】

→70 ぐらい具体的な取り組みがここに載っていて、その中で数値目標がこれだけしかないと市民の方は思うのではないのか。もうちょっと項目が多くてもいいのではないかなと思う。

⇒たくさん数値目標を設定できればいいなと思っているが、現状値が分かっていないことがたくさんあるので、今回については国の目標値等が参考にできるものをいくつかもらってきて数値目標にさせていただいた。第３回の委員会でも議論いただき、数値目標ではなく成果を判断する成果指標ということで、それぞれの取り組みごとに何らかの形で数字というのは示していきたいと思っている。また行政で把握できる数値というのは限られており、目標数値、ゴール値は定めないが、極力ほとんどの取り組みにおいて何らかの成果指標、取り組み実績は、推進委員会で報告していきたい。

【作戦２：OECM 割合】

→30％ではなくて 31％にしたところの意図というか意味は。

⇒国の目標 30%に合わせるというのがベースであった。しかし、豊岡市として、この生物多様性の部分については模範となっていきたいということもあるので、同じではなく上回る数字の 31%としている。ただ、これの実現についても、六方田んぼの５倍の面積が必要であり、非常に高い数値目標となっている。

→豊岡市は現在 28%。豊岡がこういう環境として先進的な地域であろうという意思表示であり、ちょっと無理めな目標かもしれないが、守りじゃなく、攻めのちょっと高めのハードルを掲げて５年間みんなで頑張っていこう。そういう目標と

して１％上げている。

【作戦３：環境に配慮した市民の割合】

→環境に配慮した農林水産物、食品を選ぶ市民の割合 80%、これをどういうふうに把握するのか。

⇒これについては、予算の問題はあるが市民の方に意識調査を実施していきたいと考えている。その設問にあたって国の方でも既に 69.3%という数値も把握している。今後 2025 年度に 75%になるかどうか、国民の意識調査をされる予定になっている。そういった設問と合わせるような項目を、この市民意識調査の項目の一つとしてあげていきたい。あげていくことでこの数値の達成度の確認をしていきたいと思っている。ただ、国の方では現状値 69.3%とあるが、市の方では市民の方の現状値というのは持ち合わせていない。

→具体的にどういう質問項目をされる予定なのか。あるいは国家戦略で既に数値や目標値が出ているが、その際にどういう質問をされたのか。もし何か具体的に考えていることがあれば教えて欲しい。

⇒生物多様性に関する意識調査の現状値や目標値については、国家戦略の案を見て拾ってきた。どういった流れで国民の方が環境に配慮した農林水産物、食品を選んでいる、という質問がされているか十分承知していない。

→質問の仕方によって随分とこういうのは数値が変わるので、また調べておいて欲しい。今あったように、出来れば国と比較できるようなものにしたいので、国の設問があまり誘導的でないものであればなるべく同じようなやり方で調査に備えていければいいと思う。

→同じく環境に配慮した農林水産物の意識調査、市民調査するにあたり、国の設問の中に地産地消の部分があるのなら、目標のところにも地元産品を扱うという項目もあるので設問を追加してもいいのではないか。

⇒市民意識調査については、国の調査の中で地産地消とか比較できる項目があれば、取り入れていくということも検討したいと思うが、アンケートに答える人は少ない項目の方が良い。そういった部分について、国等のアンケートも加味しながら、市民に答えて頂きやすいような感じで設問は作っていきたい。

「環境に配慮した。」ということであれば、別に豊岡で採れていなくても、環境に配慮した農作物はたくさんあり、地産地消というのをより知りたいところではある。国の方で目標値なり現状値を把握していれば豊岡市は、国などの目標値より少し高い数値を設定して、５年間のうちに市民アンケートで把握しましょうということが出来るかもしれないが、国家戦略等でも地産地消の割合に関するものが見当たらないので目標数値の設定に向け引き続き情報収集したい。

→そういう取り組みを、数字で把握するということは、中々他のところでやっていない。生物多様性という点で先進地の豊岡がアンケー

トしたら、その通りだという結果かもしれないし、いやいや意外とそうでもないな、ということかもしれない。いずれにしても豊岡がベンチマーク、基準になると思う。５年の短期戦略がどういう効果があったか検証するという市内向けの意味もあるし、より国内、国際的に向けても生物多様性のモデル地区というもので実際市民の意識を把握することは極めて重要だと思うので、それはぜひ予算化してもらいたいと強く要望しておく。

【作戦４：コウノトリ文化館来館者数】

→コウノトリ文化館の来館者数の目標数値が５倍ってすごい数字かなと思っているが、コロナ前よりもたくさん人が来ていただくという認識で良いか。

⇒文化館の来館者数について、25 万人になるのは難しいと考えている。それでも、していく必要がある、していきたい、と考えている。放鳥直後非常に多くの方に来館していただき、その後右肩下がりという状況になっている。放鳥のようなインパクトはないが、コウノトリ文化館、豊岡市のコウノトリ野生復帰、そういった生物多様性について学んでいただける施設であり、豊岡市のこれまでの取組みを理解していただき足を運んでいただける方を増やしたい。特に関西万博も踏まえながら 25 万人、1,500 万円程度の寄附金という形で実現していきたいという決意を持っている。来館者数はコロナ前の 25%増し、寄附金は 50%増し実現に向けて豊岡の取り組みを情報発信していきたいと考えている。

→コウノトリ文化館の来館者数は現在の５倍だが、寄附金は 2.5 倍。これはどういう根拠で示しているのか。

⇒コウノトリ基金寄附金については、コウノトリ文化館の来館者からの環境協力金と、企業等から直接寄付いただくものと合わせた金額となっている。文化館の環境協力金については、来館者数の減に伴い非常に大きく減っているが、企業からのコウノトリ基金寄附金についてはピークと比べると低くはなっているが、大きく下がってはいないということもあり、来館者数とはまた違った考え方で寄附金の設定をしているという状況である。

【作戦１：「まずは知る」作戦！の関係】

→「生きもの博士の登録制度を開始します。」とうたっているので、５年後の目標として、「生きもの博士を何名」という具体的な数字がそこにもあってもいいのではないか。

⇒生きもの博士、具体的に何人とあったが、過去 10 年間生きもの博士の名鑑を作るということの取り組みが進んでいないので、まずは５年間で生きもの博士の登録制度を開設するということを目標と考えている。生きもの博士同士の交流や、登録人数を次のステップ、５年後の次の段階で考えていきたい。

→目標３のところで自伐型林業に携わる人を増やします。とあってここだけ急に具体的な従事者を増やすとある。ここだけ目標が突然具体的かなと感じるがど

うか。

⇒具体的にあげられるところはあげたいということで、あげている。特にこれまでの戦略は、田んぼが重視されていたので、山や海に関しても数値目標をあげていきたいということで、この自伐型林業をあげたところ。水産業についても何か目標があげられないかということも議論したが難しかった。今後５年間の中で、海の生態系が保全されるためにはどのような数値目標を掲げて、取り組んでいけばよいかを考えたい。

→先ほどの生きもの博士の登録制度を開設するということが今回の目標だということだが、「自伐型林業従事者数、従事者を増やします」というのは、生きもの博士と同じ具体的な取り組みである。自伐型林業の従事者数５人と示せるのであれば、生きもの博士も５人と書けるのではないか。生きもの博士は何人という目標が数値として出ないのは、違和感があるなと感じてしまった。

⇒もう一度、生きもの博士の成果指標を見ていただきたいが、まず豊岡生きもの博士という定義がない。自然に関心を持ってもらう、生きものに関心を持ってもらうため、子どもたちに生きもの博士と称号をつけるのか、もっと生きものに詳しい、この人に聞いたら全て分かるような人を生きもの博士とするのか、そもそもの入口論で、まず整理が必要だと思っている。

対象が決まらないと、そこは明確には目標数値をあげられないということを理解いただきたい。

そして、コウノトリ KIDS クラブの子どもたちの人数は設定出来るが、例えば数値目標を 15 人として 15 人集めることは可能かもしれないが、もし 30 人応募があっても 15 人でいいのかというようなこともある。そして 15 人登録があったらその 15 人が年間何回休んで、翌年は来なくなってもいいのか。成果指標としてはコウノトリ KIDS クラブに参加してくれて翌年以降も継続的に参加してくれる子どもたちを増やしていくとしている。ご指摘のとおり５年後には本当に一つでも二つでも多くの項目で具体的な数値目標が設定できるような現状値の把握や、今後５年間推進委員会等や個別検討会で整理を諮っていきたい。

⇒自伐型林業のところで５名という数字を具体的にあげているのは、森林林業ビジョンを策定して森林、林業に関する行動を強めていきたい。進めていくにあたって具体的な数字も掲げておきたいという考えからこの数字が出てきている。

→この地域戦略、15 年で、読めば分かるように、あまり数値目標に適したものではない。全体の方向性は、生物多様性が何％上がりますかという戦略ではなく、そういうことに対して興味や関心を持つ市民をどういうふうに育成しますかみたいなもの。従って、数値でそういうものを表すというのは基本的に難しい立て付けになっている。今回の見直しではそ

ういうものを大きく改造するわけにはいかない。これまで出来たこと、出来なかったこと中々検証できなかったと反省がありつつも、それをなかったことにするわけにもいかないので、それを踏まえながらこの５年間の中でどういうふうに数値化するか、数値目標として設定できるところは何か考えてきたという経緯がある。その中で不十分だが、５年間の中でまた考えながら、次の地域戦略を作る時には、より数値化出来るような目標としても戦略として策定していく必要がある。ご指摘はよく分かるし、こういうフラストレーションが溜まるところも皆さんあると思う。その中で、もうちょっと何か増やせないかという気持ちが、私もなくはないが、定義を巡る問題があり定まっていない中で、それを数値に示すのは行政の計画としてはふさわしくないかなとも思う。従って、そういうような事情がありつつもその中で、今のように積極的にこういう点で数値化できるのではないかというご意見があればぜひ出してもらいたい。

【作戦１：生物多様性という言葉を聞いたことがある人の割合】

→今回が 15 年のとりあえずの一括りと考えるのであれば、聞いたことのある人の割合 100%を目指してもいいのではないかと思う。その上で言葉の意味を理解している人が半分なら 50%、51%とかという二つに分けてもいいのでは。

→数値目標の少なさとか、バランスについて、同じようにもう少しなんとかならないか。具体的な提案として、作戦１の方で言うと、生物多様性地域戦略を少しでも読んだことがある人の割合だとかもどうか、と一つ思った。これこそ現状値が分からないということにはなると思うが、現に現状値の分からないものも、他のところでも挙がっているので、そこまで気にしなくてもいいと思う。少なくとも生物多様性地域戦略を読んだことがある人の割合は生物多様性という言葉を聞いたことがある人の割合 58%よりはだいぶ少ないだろうという推測はできるので、おおざっぱに目標値を 60%とか 70%に立ててしまってもいいのではないかと思う。

⇒まず１点目の、数値目標で生物多様性という言葉を聞いたことのある人であるとか、環境に配慮した食品を選ぶ市民の割合というのは、確かに現状値を認識していないが、国の数値目標であったり、国の現状値があるということで、それを拠り所に数値目標を設定ができるが、生物多様性地域戦略を読んだ人があるかどうか、となると、国の目標もない、現状値もない中で、中々難しいということと、生物多様性地域戦略を読まないといけないのかとなると、それもどうかなと思ったりするので、そこは正副委員長と協議させていただきたいと思う。

→先ほど言われていた生物多様性というものを聞いたことがある人ではなく、ちゃんと説明できる人を指標にしたらいいのではないか、というご提案だったが、そういうことも含めて何かあれば。

【作戦２：生物多様性という言葉を聞いたことがある人の割合】

→作戦２も取組みがたくさん挙げてあり、観察会を開催しますというような取り組みがいくつかある。ブラックリストを使った学習会とか、レッドリストを使った学習会とか、こういう現状値の把握が簡単で、数値化も簡単なもの、例えば開催回数とか、参加人数を作戦２の数値目標として追加してはどうかと思った。

⇒ブラックリスト、レッドリストを使った勉強会、ここは確かに数値目標として挙げられるかと思う。設定する目標数値は、正副委員長と事務局とにご一任いただきたい。

【作戦１：作戦３全体について】

→作戦３に関して言うと、水稲の作付け面積、林業の従事者、お米の導入になっていて、野菜のことがない。農業、林業、水産業３種類あって作付け面積、範囲と従事者と学校給食への導入でそれも３種類くらいあるので、それを掛け合わせたらそれなりに数字は増えるし、作戦３の成果指標の中でもかなり数字が出ているし、有機農業実施計画の中でも落とし込める数値目標は農林水産課で出されていると思うので、それぞれ入れて欲しい。特に水産業がここに明記されていないので、それぞれの分野での従事者、面積であったり、学校給食への導入だったり出していただけるととてもありがたい。

⇒最近の動きとして有機農業の実施計画を今まさに作っており、そういった中からでも出てくる数字はあると思うので、こちらとリンクを図る意味で盛り込めるものは盛り込んでいけたらと思う。

自伐型林業、林業の従事者が書けるのに、農業スクールでの就農者のような数字が出てこないというのもバランス的にどうかと思う。分野ごとの項目数もばらつきがあるので全体のバランスも考えて、こちらで精査していきたいと思う。

→農林水産課と協議の上で、どういうものが盛り込めるか検討していただくということで、今の意見をふまえて検討を詰めていただく。

【作戦１：目標３について】

→実態把握になるが、作戦１の目標３に「見える化された生きものの情報を公共工事や自然再生の取り組みに活用します」と書いてある。結局工事の情報というのは文化財室に全部行くので、情報共有すれば一番効率的に分かる。年間どれくらいそういう工事があって、そこで何が起きていたのか見る必要はあるが、出来ないにしても、そういう件数がありましたと、せっかく情報があるんだったら、それは記録しておくべきだと思う。

⇒工事の関係で、市の文化財室で申請を受けている。市の方に情報が伝わっているものの共有されていないので、どのようにすれば漏れることのないようにできるのか考えていきたい。そのためにも何らかの形で生きもの情報の見える化が実現できればと思う。

→目標に挙げるかどうかはともかく、あくまで記録が必要だという話しで。その情

報をまずは事務局のほうで把握する必要があるというご指摘だったと思う。

【作戦３：数値目標について】

→学校給食における豊岡産無農薬米導入比率ゼロから 100%、かなり劇的な変化だが、もう少し詳しく説明をお願いできないか。

⇒国の「みどりの食料システム戦略」が示され、今全国的に各市町で取組みが進められている。豊岡市においても、さらに有機農業の取組みを進めていくための一つとして、これまで「コウノトリ育む農法」の栽培面積の拡大に取り組んできたが、中々ここにきて伸び悩んでいる。そのテコ入れとして、農家の皆さんが市内の子どもたちのことを思って、安全安心なお米をさらに作る、という面積拡大を進めていく一つのツールとして、給食での無農薬を導入出来ないかということで今年試行的にさせていただいた。今現在は、「コウノトリ育むお米」の減農薬のお米を毎食提供しているが、無農薬のお米に転換を関係機関と協力して実現していきたいと考えている。

→ちょっと右肩下がりになっているところを、うまく上げたいというところもあり、また子どもたちに安全安心なものを提供したいという考え方で農家の人が賛同、協力を得ながら上げていくという取り組みであると思う。この取組みと豊岡型環境創造型農業、作付け面積の比率 38%から 51%というのは、ゼロから 100 になると作付け面積の比率もかなり上がってくると思う。そのへんの数字はまだ把握していないということか。

⇒今、年間で学校給食で提供するお米が約 90 トンで、慣行栽培でされている水稲がすべて無農薬に変われば、その分転換されたということになる。その面積が約 20 ヘクタールぐらいということになるので、現状値に 20 ヘクタールをプラスできると思っている。その分が 51%にどれだけ寄与するかというのは、計算できていないが、上向きの数字になっていくということで、こちらの数字も実現に向けて近づいていくということになろうかと思う。

→中々目標の数値を決めるのは難しい話しだが、例えば自伐型林業、これは多分行政とこの会のある種の意思表示。里山というものを何とかしなきゃいけないということを示している。それが目標だと思う。OECM もそう。30%でいいところを 31%にするというのはやはり意思表示だと思う。バランスが悪いという問題は確かにあって、そういうことに対して積極的にご意見いただきました。いただいたご意見をまた精査して、なるべく反映できるように調整したい。

閉　　会　：　出口副委員長